

機関番号：32604

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008 年度～2010 年度

課題番号：20720011

研究課題名（和文）近世中国におけるムスリムの人生儀礼研究

研究課題名（英文）Study of muslim' s rituals in early-modern China

研究代表者

佐藤 実 (SATO MINORU)

大妻女子大学・比較文化学部・助教

研究者番号：70447671

研究成果の概要（和文）：

本研究では近世における中国ムスリムの人生儀礼研究の具体的な分析として、劉智が著した『天方典礼』の婚姻篇、喪葬篇を検討した。まず『天方典礼』は朱熹『家礼』の構成にならって書かれていることがわかった。劉智は儒教儀礼について真っ向から否定することではなく、逆に儀礼にたいする考え方はイスラームと儒教とでは共通していると主張している。そしてそうした人生儀礼を実践することによって、中国ムスリムじしんが中華の秩序をになっていると認識していたことを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

This study analyzed Muslim's rituals in early-modern China, and considered Liu Zhi's "Tianfang Dianli (Rules and Proprieties of Arabia)", chapters of marriages and funerals, for example. We can recognize that "Tianfang Dianli" was modeled after the construction of Zhu Xi's "Jia Li (Family Rituals)". Liu Zhi doesn't deny rituals of Confucianism completely, on the contrary he says that the Muslim and Confucian viewpoints on initiation are the same. We have seen that by practicing these rituals, Chinese Muslims believed that they were carrying out Chinese traditional order.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009 年度	900,000	270,000	1,170,000
2010 年度	300,000	90,000	390,000
年度			
年度			
総計	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野：中国イスラーム思想史

科研費の分科・細目：哲学・中国哲学

キーワード：イスラーム、中国、儀礼、劉智、天方典礼

1. 研究開始当初の背景

近世中国ムスリムの人生儀礼に対する文献学的研究は、儀礼を支える思想の分析、思想と儀礼との関係が深く議論されてこなかった。

研究代表者は中国ムスリムの思想分析を目的とした研究会の中心メンバーとして

研究実績があり、その成果を利用して中国ムスリムの儀礼を思想的側面から考察しようとした。

2. 研究の目的

近世における中国ムスリムの人生儀礼の

研究を通して、中国イスラーム思想の特徴を解明することが目的である。

さらに「中国イスラーム思想史」と呼ぶような体系的な思想史を構築するための下地を作る目的もある。

3. 研究の方法

劉智著『天方典礼』を研究対象テキストとして選定し、電子テキストを作成した。そのうえで婚姻篇、喪葬篇を中心に、儀礼について述べた他のイスラーム漢籍、具体的には王岱輿『正教真詮』、馬注『清真指南』、劉智『天方典礼』、金天柱『清真釈疑』、馬安礼『真詮要録』などの書を比較参照しつつ読解・分析をすすめた。

また中国伝統思想である儒教や外来思想であるキリスト教と文献学的に比較・検討を行った。

文献資料については研究代表者が所属した関西大学アジア文化交流センターが所有する『四庫全書』、『中国基本古籍庫』などのデータベースを使用することで、研究を効率的に進めたが、2009年度から大妻女子大学に転出したため、上記のデータベースが使用できなくなったことは想定外であった。

加えて海外調査を行い、現在の中国のイスラームコミュニティにおける人生儀礼に関する聞き取りを行い、文献学的にはすくいとることが難しい儀礼の特徴を調査した。

4. 研究成果

(1)

近世における中国イスラームの人生儀礼研究の具体的な分析として、劉智が著した『天方典礼』の婚姻篇、喪葬篇を検討した。その際に近世中国の人生儀礼を規定した朱熹の『家礼』と比較することによって、中国イスラームの人生儀礼に対する考え方の特徴がうかがいあがってきた。

①まず婚礼も喪礼も式の次第にかんしては『家礼』ときわめてよく似ていて、劉智が『天方典礼』を編む際に、『家礼』を参考に見ていたことが見てとれた。他所で劉智が『家礼』について言及してもいることから、『家礼』を参照していることは疑いない。いっぽうで朱熹『家礼』が重視する祠堂、位牌については『天方典礼』が説く婚礼、喪礼では設置されない。ただし、それは悪習として否定するのではなく、「言及しない」という消極的な態度で把握していた。

また儒教と共通の思想を有する（と思念される）イスラームの婚礼、喪礼を実践することによって、中国イスラームがじしんを（儒教倫理を支柱とする）中華の秩序をになうフル

メンバーとして認識していたことも判明した。したがって祠堂や位牌を真っ向から否定することはなかったと考えられる。

②儒教との距離の親和性についていえば、『天方典礼』では上帝をアッラーに比定したうえで回（イスラーム）と儒の同一性を主張する。劉智より前のイスラーム知識人、王岱輿などが中国古来の上帝とイスラームの神、アッラーを明確に区別していることから、文献上ではあきらかに『天方典礼』は画期となる。そしてこの回儒同一説は中国イスラーム知識人のあいだで受けつがれ、民国初期までつくことになる。

回儒同一説を担保したのは、上古の時代には東土の人々も上帝、天といった神に類似した対象を主としていたと考える回儒同源説である。この回儒同源説じたいはファンタジーかもしれないが、たしかに東土では上帝、天を祀っていたのであり、中国の伝統に立脚している。だがこの説をさらにささえるのは、人類は神が創造したアダムからはじまったというイスラームの教義である。したがって実は回儒同一説の主張はイスラームの教義から、イスラームのアイデンティティを保持したまま導出できるわけである。

③以上、中国イスラーム知識人はイスラームにおける婚礼、喪礼が中華の倫理道徳を体現していると考えていた。したがってその実践は中華の倫理道徳の実践と認識されたのである。中国イスラーム知識人の心性の一端が解明できた意義は小さくないと考える。

(2)

海外調査としては、山東省済寧市と黒龍江省哈爾濱市の調査を行った。

山東省の済寧は、本研究が対象としている近世中国において、イスラーム教育の拠点となった土地である。当時、とりわけペルシア語文献を重視した教育を行っていたことで有名である。現在はペルシア語にかんしてはほとんど講習されていないことがわかったが、済寧東大清真寺モスクのアホン（宗教指導者）が、英語学習によって中国イスラームの宗教活動が海外に広がることを望んでいたことが印象的であった。

また海外のイスラームからは中国イスラームの宗教生活がルーズであると非難されることがままあるが、喪礼はきちんとシャリーアにしたがって行っているということを強く主張していた。人生儀礼のなかでも喪礼を大切にす姿勢がみてとれた

黒龍江省のイスラームコミュニティは、清朝初期に開拓移民として移住したイスラームに

よって形成された比較的新しいものである。哈爾濱市内のモスク調査からは、近代的な音響設備などが設置され、高齢者が中心ではあるがムスリムたちが熱心に参拝をしていたのが印象的であった。

また哈爾濱市の隣市である阿城清真寺においては、劉智の『天方性理』がアホン必読の書と認識されており、近世中国ムスリムの著作が現代にも受けつがれていることを確認した。

(3)

『天方典礼』を読み進める過程において、中国ムスリム知識人がイスラームの人生儀礼は儒教のそれと近似していると考えていることがわかった。それは形式も似ているのだが、むしろ形式を支える倫理道德の共通性がその根拠となっていた。

このムスリムによる内省は後にムスリム社会の外へと発信されることになる。それは大多数である非ムスリムにイスラームの存在を認めさせようとした「釈疑（疑いを解く）」という言説としてあらわれる。

本研究によって「釈疑」言説の検討がთვისの研究課題とし浮上した。今後はこの「釈疑」言説の検討をとおして、さらに中国イスラームの特質の一端を明らかにしていきたい。

また東洋文庫から馬君実『天方衛真要略』を入手した。本書は乾隆年間に刊刻されたとされる儀礼書であり、これによって『天方典礼』との比較もおこなうことができ、より立体的な儀礼研究が期待される。今回の研究期間では検討できなかったのも、本書の分析も今後の課題となる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

①佐藤実、近世における中国ムスリムの初等教育-『天方三字経』初探、東アジア文化交渉研究、査読有、第2号、pp. 283-311

②佐藤実、アッラーは上帝か?、第1回次世代国際学術フォーラム 境界面における文科の再生産報告書、査読無、2009、pp. 107-124

③佐藤実、近世における中国イスラーム漢籍の出版、民族紛争の背景に関する地政学的研究、査読無、No. 8、2009、142-152

[学会発表] (計4件)

①佐藤実、イスラーム漢籍における用語の変化について、関西大学文化交渉学教育研究拠点・第1回次世代学術フォーラム「境界面における文化の再生産、2008年12月14日、関西大学

②佐藤実、近世における中国イスラーム漢籍の出版、京都大学イスラーム地域研究センター・ユニット2「中道派の研究」第2回研究会、2009年1月11日、大阪大学世界言語研究センター

③佐藤実、中国ムスリムの脳に対する考え方-劉智を中心に-、第25回東洋大学中国学会、2010年7月31日、東洋大学白山キャンパス

④佐藤実、中国イスラームの「釈疑」-布教とは別のありかた-、阪神中哲談話会第388回例会、2010年10月30日、茨木市市民会館

[図書] (計2件)

①吾妻重二、二階堂善弘、雄松堂出版、東アジアの儀礼と宗教、2008、425 (pp. 233-244)

②堀池信夫、黒岩高、佐藤実、他10名、中国のイスラーム思想と文化、勉誠出版、2009、218 (pp. 31-44)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

○取得状況 (計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐藤 実 (SATO MINORU)

大妻女子大学・比較文化学部・助教

研究者番号：70447671

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：